東京大学広報誌 第3号
TANSEI
The University of Tokyo Magazine
October, 2000 No.3

淡青

特集 東京大学における教育

[総長を囲んで] 総長と学生たちとの座談会

[教育・研究の現場から] 大学院教育学研究科・教育学部／海洋研究所

[世界の中の東京大学] 東アジア研究型大学協会の活動と学生キャンプ2000

[サイエンスへの招待] 明日の研究者への期待 [キャンパス散歩] 東大の時計塔

東京大学広報誌
TANSEI
October, 2000
3

総長と学生たちとの座談会

東大と東大生について語ろう

教育の在り方が問われている現在、学生たちは何を考え、大学に何を期待しているのでしょうか。総長を囲んで、学生たちの語る東大と東大生の現実とは。

司会　皆さんが入学する前に想像していた東京大学と、実際の東京大学に違いはありましたか。

酒井　入る前は変人、奇人が多くいるのかなと思っていたのですが、自分にあうような変な人間があまりいなくて……。みんな勉強に熱心で真面目ですね。

田頭　変人はけっこう多いと思いますよ。(笑)

蓮實　変人ってどういう人のこと。

酒井　具体的にはいいにくいのですが、ふつうの人とはちがった考え方をするとか。

蓮實　あなたは変人なの。

酒井　変人になりたいと思っています。(笑)

田頭　いわゆるオタク系ですか。

酒井　オタクというよりは……。

田頭　一芸に秀でた人間とか。

酒井　そうです。自分は早稲田大学の映画サークルにはいっていたのですが、独創性あふれる議論ができるのは早大生のほうが多いと思います。そういう人を変人、奇人といっているのです。

司会　授業が終わった後で、たまり場でワーワーやるわけでしょう。東大ではそういうことは少ないですか。

酒井　少ないというわけじゃないんですけど、そういうところで独自の意見を言える人があまりいないんです。映画やドラマ、文化、経済など、いろいろな話をするのですけれども。

高木　無難な意見が多いということですか。

酒井　そうですね。

蓮實　変人、奇人のたぐいはどこにもいるでしょう。それに、そのような人を求めるのではなくて、自分が変人、奇人になって、おれって変なんだってみんなに思われればいいじゃないの。(笑)

酒井　すでに思われているみたいです。(笑)

田頭　私は、この大学はもう少しアカデミックなところかと思っていましたが、本当にふつうの人が多い。あまり学究的でないのが気になりました。サブカルチャーが好きでマンガが好きで、映画が

淡青

「淡青」について

東京大学と京都大学(当時は東京帝国大学、京都帝国大学)が1920年に最初の対抗レガッタを瀬田川で行った際、抽選によって決まった色が「淡青(ライト・ブルー)」であり、本学の運動会をはじめスクール・カラーとして親しまれてきました。

新年度にはいり本誌の編集スタッフも一新し、3号の編集に取り組んできました。創刊号を刊行してから1年にしかなりませんが、この間に本学の広報にかんする状況は大きく変わりつつあると思います。本学から発信したい情報がいかに多くあるか、そして多くの方々に関心をおもちいただいているかを、私たち自身があらためて認識できたと実感しています。

本号の特集は、学部教育に焦点をあてた「東京大学における教育」です。本学の特徴のひとつは、教養学部で1・2年生全員を対象に行うヴァラエティにとんだリベラル・アーツ教育にあります。そして、3年生からの専門教育は、各学部・学科などでそれぞれに特徴あるカリキュラムがくまれています。取り上げることができたのはごく一部ですが、本学の教官がどのように教育を考え実施しているか、そして学生がどのように評価しているかについて、ありのままを紹介する企画です。また、学生がどのように1日を過ごしているかも、お伝えすることにいたしました。

総長には、この特集とも関連し学部学生と座談をしていただきました。学年と専門が異なる4名に参加していただきましたので、時間がやや不足したきらいはありますが、総長を囲んで東大と東大生について語る機会は有意義だったと思います。

「教育・研究の現場から」と「サイエンスへの招待」では、多くの学部・研究科あるいは研究者のなかから、今回は大学院教育学研究科・教育学部と海洋研究所、そして史料編さん所の黒田日出男教授に登場していただきました。「世界の中の東京大学」では、この夏に本学が主催校であった、東アジア研究型大学協会の学生キャンプを中心に紹介いたします。「キャンパス散歩」では、前号までの自然の姿から建造物あるいはモニュメントへと趣向を変え、まず時計塔を取り上げることにいたしました。

(東京大学広報委員長　大塚柳太郎)

東大には、独自の意見を言える人があまりいないんです。映画やドラマ、文化、経済など、いろいろな話をするのですけれども。

酒井康輔（さかい・こうすけ）　文科三類一年生

好き。大ヒットを飛ばすような映画です。

蓮實　大ヒットする映画はぼくも好きですよ。（笑）

田頭　そういうことを言っているわけではなくて、ものの考え方が多少幼いという点でふつうだなと思っているわけです。

蓮實　あなたは幼くないわけ。

田頭　幼いと思います。（笑）

蓮實　幼いなと思っている自分はどうなのか、どういうときに周囲の人を幼いなと判断できるのかが気になります。でも、あなたの言っていることは何か真実に触れていると思います。

田頭　私は、東大生も流行に流されやすいと感じています。一般の大学生と変わらない。

蓮實　変わらなくていいじゃない。考えてごらんなさい。東大には一学年が三六〇〇人いるわけですよ。三六〇〇人といったら、これは大衆です。外国のエリート校では一学年に一〇〇人ですよ。たとえばフランスでは、大学というのはエリートのいくところではなく、高等専門学校へいかなければ偉くならない。そこでは一学年一〇〇人くらいで、学生は非常に高い水準にあるし、一方で家庭も限られてくる。状況は全然ちがうんです。

鈴木　高校生にとっては、東京大学を受ける時点である程度イメージがあると思うんです。三六〇〇人もいれば当たり前なのですが、意外だったとか、変わった人がいないとか、そういう意見が出てくるのは、根づいてしまった「東大生」というイメージが影響しているのではないかと思います。

高木　私は入学前から、ふつうの人が多いと思っていたので、とくにギャップは感じませんでした。実際に入学してみると、しっかりしている人が多くていいと思います。

蓮實　しっかりしているとは、判断力が優れているということですか。

高木　きちんと自分の考えをもっている、あるいはもとうとしている人です。そういう人も多いと思います。

蓮實　高木さんも鈴木君もテニスをやっていますね。どうしてみんなテニスをするのですか。

高木　私はほとんどしていません。（笑）私は中・高でバスケットボールをやっていました。集団競技は、自分が練習を怠けるとみんなに影響してしまうので、個人の責任が重大です。大学に入ったらもっと自分のペースでスポーツに取り組みたかったので、個人競技から選びました。しかもテニスならやる人も多いし、コートも多いので、社会人になってもつづけやすいと思ったからです。

鈴木　中学、高校とクラブでやっていたのですが、大学ではクラブではなくサークルを選びました。勉強したいという意識もありましたし、どちらかといえば厳しさよりも楽しさを求めたかったからです。でも、サークルでもやはり厳しさもありますし、ぼくの場合、つい最近までサークル連盟の委員長でしたので勝手なことはできません。

蓮實　集団のなかでは勝手にできないというのは、なぜでしょう。集団に対して断固自分の意思をつうじさせたいという気持ちはないの。

鈴木　それも確かにあるのですが、それをしていい人間と、してはいけない人間がいると思います。委員長の立場で自分の意見を押しとおすと、まとまりがなくなってしまうのを感じたのです。

蓮實　なんだか政党の総裁みたいじゃない。（笑）

鈴木　そういう意識が少しありました。そのほうが軸となる立場としては楽だと思うんです。

蓮實　楽を求めるのですか。

鈴木　正直言ってそうです。一つのことだけに力を注ぐこともできなかったので。上に立つという意味では総長も同じと思いますが、いかがですか。

蓮實　もちろん東大には支援してくださる方々がたくさんいますから、私も職務を果たすことができるのですが、やはり自分でこうしてくれませんか、あるいはこうしたいんだけれども、と言ったうえでないと力にはなっていただけません。

おもしろい授業・つまらない授業

司会　大学での授業に話題を移しましょう。

高木　まず、内容に興味がある授業はおもしろいです。また、「こんな考え方があるのか」と気づかされる授業もおもしろいです。

蓮實　そういうのはあるでしょう。

高木　あります。たくさん心に残っています。たとえば、駒場（教養学部）で受けた記号論理学とか経済の授業などです。社会は曖昧だからこそおもしろいのでしょうが、あまりに曖昧で嫌だなと思っていたら、きちんとしたフレームワークが設定され論理的に分析していることに驚きました。

何がやりたいかがわからなかったから、自分が一生やっていきたいと思えるような学問に出会わないかなと、いろいろな授業を受けてきました。

高木悠貴（たかぎ・ゆき）　経済学部三年生

蓮實　それは大きな教室の講義、それとも小さいゼミ形式のものですか。

高木　大教室のものもあります。

蓮實　大きな講義でも自分なりにアッと思うような授業があったということですね。

田頭　内容がよいのに、なぜこれだけつまらない授業ができるんだろうというのもありますよ。素材はいいのに。英語Ⅰの教科書なんてすごくよくできているじゃないですか。

高木　選択と必修の講義でもちがっていたと思います。必修は全員が否応なく受講するので、やる気のない人も受講することになります。そうすると、教官の方でも、寝ているような学生が何人もいたらやる気がなくなってしまうのではないでしょうか。

酒井　自分は語学に興味があるので、コミュニケーションのクラスをとっています。英語の授業が多ければいいなと思っています。

高木　それは納得です。英語はもうちょっと多いほうがいいですね。

酒井　入試を受けた直後から、英語力はどんどん落ちてくるし。

蓮實　話す能力も聞く能力も含めてですか。

高木　私は両方とも急降下です。（笑）

蓮實　英語の勉強などは大学でやらなくたっていいじゃない。今はテレビだって、ほとんど英語だけの番組があったりするわけでしょう。

田頭　授業にないとやらないというのは、確かに問題ですね。

酒井　学生の甘えなんですよね。

大学でやるべきこと

司会　自分のやりたいことをみつける場、やりたいことがやれる場として、東京大学をどう思いますか。

酒井　友だちは教養学部で二年間のモラトリアムが与えられるのは非常にいいと言っているのですが、自分としては語学一辺倒もしくは映画一辺倒でいきたいという気持ちがあります。しかし、専門に進んだ後で、もっとほかにいろいろ勉強したいことがあったと後悔している先輩もいるので、自分の考えが浅いのかなと思っています。

高木　そういうふうに、やりたいことがわかっている人はいい。私は何がやりたいかがわからなかったから、自分が一生やっていきたいと思えるような学問に出会わないかなと、いろいろな授業を受けてきました。そういう意味ではすごく有意義でした。今の学部の勉強で役に立つものもありますし、役に立たなくてもおもしろかったと心に残っているものもあります。

鈴木　ぼくは酒井君とおなじで、入った当初からやりたい方向は決まっていました。でも、同級の四年生の話を聞くと、方向が決まっていない人にとってはいい機会だったというし、逆に方向を決めていたのに転換した友人から、最初の考えが自分にあっていないことを知ってよかったという話も聞きます。どちらにしろ、すぐ専門にわかれるのではなく、少し猶予が与えられるというのはいいことだと思います。

蓮實　ところで、あなた方が自分のやっていることと、世界の同世代の人たちがやっていることを仮に比べることができたら、自分は世界的な水準でどのへんにいると思いますか。

鈴木　学生としての水準ですか。

蓮實　そうです。鈴木君は来年の四月に学士になりますね。世界にはbachelorという人がいっぱいいるわけです。そのなかで自分は東大で学んで、かなりいい線までいったと思いますか。たとえば、あなたがいる工学部というのは日本にしかない学部ですね。外国にはポリテクニークなどというものがたくさんあります。そういうところで工学を学んだ人たちとあなたとを比べたとして、あなたは責任をもって自分のほうがいいと言えますか。

鈴木　現時点では言えません。

蓮實　なぜ言えないの。

鈴木　知識の足りなさもありますし、自分のやりたいことはこれだと、はっきりとアピールできる段階にはない気がするのです。就職せずに大学院でもっと学んでみたいというのも、自分がしたい

私は、この大学はもう少しアカデミックなところかと思っていましたが、本当にふつうの人が多い。あまり学究的でないのが気になりました。

田頭紀子（たがしら・のりこ）　理科三類二年生

総長を囲んで　東大と東大生について語ろう

就職せずに大学院でもっと学んでみたいというのも、自分がしたいことについて自信を身につけたいからです。

鈴木健（すずき・けん）　工学部四年生

ことについて自信を身につけたいからです。

蓮實　いつか自信がでるだろうということではないと思うんです。それぞれの年齢で、それぞれの時期に、人びとは知らないところで勝負している。その人たちのなかで自分はどのくらいだろうと考えることはたえず必要なんだけれども、あなたはまちがいなく勝負できるのです。なぜかというと、日本の工学部みたいに工学のことだけを専門にしている大学は世界にないからです。米国のＭＩＴ（マサチューセッツ工科大学）だって、大学院はともかく、もっともっとのんびりしたものですよ。

鈴木　比較する対象がどういうところなのか、見たこともありませんし。

蓮實　どうしてほかを見なくてやっていられるのでしょう。世界の大学に工学部なんてほとんどない。そうしたら、自分が絶対上だという自信がでてきませんか。ただし、工学にかんしては上だけれども、果たしてそれでいいのかという、自分に対する批判的な視点も出てくると思う。

田頭　それだけ進んでいる日本の工学部がありながら、なぜアメリカのほうがノーベル賞の受賞者が多いんですか。

蓮實　だって工学にノーベル賞なんてないもの。

田頭　物理学賞とか化学賞とかは。

蓮實　その話をすると長くなるけれども、ぼくは絶対今後とれると思っています。物理学賞にしても、医学・生理学賞にしても。たまたま、あるレポートを読んだばかりのところですが、私の考えているとおりでした。日本の学問にはセックスアピールがないんです。人をひきつけない、正しいことだけやっているんです。

田頭　パフォーマンスがないということですか。

蓮實　パフォーマンスもないし、優れた表現能力もないということです。ところで、田頭さんは基礎医学や生命科学なら東大だと先輩に聞かされて入学したということですが、どんな先生の授業を聞きたいですか。

田頭　世界の最前線で研究している人です。

蓮實　たとえばどういう先生。

田頭　利根川進さん（ＭＩＴ教授）とか。

蓮實　利根川先生はもちろん立派な方ですし、東大に来て話していただく機会もあろうかと思います。それで、東大の先生ではどうですか。

田頭　それは考えていませんでした。

蓮實　どうして。噂にだまされて東大に入ったのなら、本当かどうかを試して、この先生の授業をぜひ聞きたいというのがなくていいの。

田頭　言われてみればそうですね。

蓮實　言われてみればじゃなくて、それがふつうでしょう。すごい先生がいますからみつけてごらんなさいよ。あなたがここを選んだのはまちがいない。まちがいないけれども、そのことをあなたがまだ確かめていないので、ぼくは驚きました。

田頭　甘かったです。探します。

東大生というアイデンティティ

司会　皆さんは東京大学に何を期待してきたのでしょう。また、他大学と比べて東大はどうあるべきなのでしょう。

田頭　ほかの大学と比べて、そんなにちがうわけじゃないですよね。

蓮實　ちがいがなくていいというのは、最初にぼくが言ったでしょう。（笑）

鈴木　学問にかんしては、他大学のことはわからないのですが、学生は違わないと思います。しかし、こっち側がそう思っても、向こうは何か一線を画したような見方をする風潮は感じます。

蓮實　その風潮に対してあなたはどう振る舞いますか。本当は同じなのに。

鈴木　振る舞いにくいです。どう振る舞っていいのかがわからなくて。

蓮實　向こうがそう扱うならば、自分もそうなっちゃうぞということはないですか。

鈴木　ないです。一緒だと知ってほしいと思っています。

蓮實　個人の本質なんか知らないというのが社会ですよね。それなのに、知ってほしいというのは甘えじゃないですか。

鈴木　そうですね。

蓮實　この大学は国民のお金をつかって、よい条件のなかで勉強させてもらっていると思います。それでも、ぼくは君たちと一緒なんだよって言い張っていられますか。

鈴木　確かに、すぐそれを理解してもらうことはできないと思います。

蓮實　それから、どうしてそのことを理解してもらわなければいけないのですか。同じということは原則としてわかります。でも、人間一人ひとりちがうわけでしょう。そうしたら、君たちがそう思うなら、ぼくはちがったところを見せてあげようって気にならないですか。なにも重荷になってまで、本当は同じなんだけどわかってというところに、エネルギーを費やすことはないじゃない。

鈴木　前にも言ったのですが、ほかの人に同調するほうが楽な面があるんです。

田頭　日本人ですね。

蓮實　そんな楽なんていうのは、三年か四年後に本当の競争をするときには、ちっとも楽ではなくなるものです。あなたは大学院に進むかもしれない。そうすると本当の競争が始まるわけです。そのときに楽というのは何の役にも立ちません。だから、何の役にも立たない楽に、慣れていていいのかなというのが、ぼくからの質問なんです。

酒井　他大学の友だちに会うと、「東大生」という目で見られることはあります。でも、自分は大学にブランドがあるとはまったく思っていないので、東大生といわれても全然感じないというか、どうでもいいです。同調もしないです。

高木　こんなにいろんな人がいるのに一括りにされるのは、気持ちのいいものじゃないですね。

田頭　東大生と東大生じゃない人とが一緒にいるときに、東大生が馬鹿な振る舞いをすると、東大生なのにそんな馬鹿なことしてと喜ぶ人がいるのは、おもしろいと思います。

蓮實　その楽しみを与えてかまわないわけです。ただし、そんなところに東大生としての本質はないわけでしょう。同じことはぼくにもありますよ。東大総長なのにと、みんなに指さされて。（笑）「東大総長なのに北野武と会って」とか言われますよ。でも、そんなことは意に介していませんけどね。

司会　東大生をほかの人が特別視する原因のひとつは、東大の入学試験といわれます。皆さんはそれをくぐりぬけてきたわけですが、今のような入試をどう思いましたか。

田頭　私は入試自体には賛成です。理系にかんしてですが、いい問題をつくっていると思います。

鈴木　東大の入試問題はむずかしさはとくにないでしょう。いかに短時間にこなすことができるかが、問われていると思いますけど。

蓮實　それは東大のひとつの伝統で、理詰めに考えればできる問題のほうが多いわけです。その点では私はいいと思っているのです。皆さん方が東大に入られて、入試が機能していると周りの人たちを見ながら思いますか。

高木　むずかしい問題ばかりにすると、ふつうのまじめな人に不利じゃないですか。特別に塾とかにいくような人はいいかもしれないけど、高校の教科書をきちんと勉強して高校生らしい生活を送って、入試もという人もいるわけですから。入った後でどっちが優秀なのかはよくわかりません。

蓮實　そこからまた競争が始まるわけです。入った段階からね。

高木　ですから、いろんな人が受かる可能性があるということでは、難問ではなくて、リーズナブルな問題のほうがいいと私は思います。

田頭　そつなくこなす人にとってですか。

蓮實　世の中には東大生はそつなくこなす人だというイメージがあるわけですよ。もうひとつは、そつなくこなしているだけでは、今後東京大学の力が落ちるかもしれないという批判も世の中にあります。あなたは「そつなくこなす」と言ったけれども、あなたは自分をそつなくこなす人ではないと思っているでしょう。

田頭　悪い意味でそつないと思います。秀でたところがないという意味で。（笑）

総長がみる東大生

司会　この四人にかぎらず総長からみて、最近の東大生に対する考えをお聞かせください。

蓮實　東大総長は東大教授ではないんです。東大で教えることもできない。だから最近の学生はよく知らないけれども、ぼくが過去一〇年ぐらいみたかぎりでは、非常におもしろい学生がいる。ぼくのところで学んだ学生を外国の大学にだしたときに、ああいう優れた学生をぜひもう一度送ってくれと言われるのがほとんどです。ですから、ぼくたちが教えた学生は世界につうじるという自信はあります。

現在では、外国の先生方も東大を非常に重要な人材供給源と思っているわけです。世界のいろいろな大学の先生がここにいらっしゃいますが、東大の学生はとにかくすごいと言うのです。みんながみんなではないだろうけど、本当に自分でやりたい仕事をもっていれば、かならず世界にも通用するということです。ぼくが学生だったころよりも、あなた方のほうがはるかに恵まれていると思うし、はるかに才能もあると思うので、そのことを強く訴えかけたいのです。

高木　自分に才能があるとは思えませんが。

田頭　私も思いません。

蓮實　これは客観的な比較の問題であって、私たちのころは、才能というものが開花する以前の段階に学生はおかれていたわけです。ですから、ぼくはそんな東大から一度出たわけです。ところが今は、あなた方のように、その程度の東大だってまあいいやと思っているわけでしょう。ところが、東大は明らかによくなっているんです。だから、それを活用していただきたいということです。私たちのころに比べて世界的な研究者はたぶん一〇倍ぐらい、もっと増えたかもしれませんね。そういう方々に授業をしていただいているのだから、絶対におもしろいはずです。

（二〇〇〇年七月二四日）

〈司会〉大塚柳太郎（おおつか・りゅうたろう　広報委員長）／羽田正（はねだ・まさし　東洋文化研究所教授）

ぼくが過去一〇年ぐらいみたかぎりでは、非常におもしろい学生がいる。ぼくたちが教えた学生は本当に自分でやりたい仕事をもっていれば、世界に通用するという自信はあります。

蓮實重彦（はすみ・しげひこ）　東京大学総長

特集

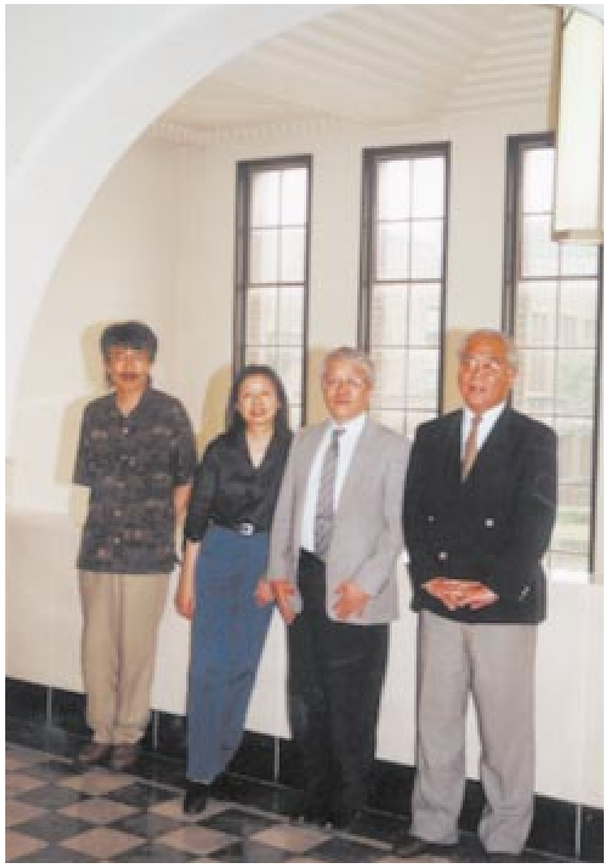
東京大学における教育

東京大学では、入学したばかりの学部1年生のための基礎的・入門的な講義から大学院博士課程の学生を対象とする専門的・先端的なゼミに至るまで、内容も対象もさまざまな授業が数多く行われています。教育は研究とともに大学に期待される二つの大きな役割のうちの一つであり、本学ではいかに効果的な教育を行うかをめぐって、構成員が常に真剣に話し合い、その結果を実行に移してきました。ここでは本学の教育やその改革の試みがいかに行われているのか、その一端をご紹介しましょう。まず、学部1・2年生の授業を担当する教養学部の授業と改革について、教官と学生の声をまとめてみました。また、実際に各学部や研究科の教室に入りこんだレポーターから、新しい魅力的な授業の試みのいくつかを報告してもらいます。さらに、本学の学生は一体どんな勉学生活を送っているのか、その実態を探ってみました。「大学における教育」という古くて新しく、そして難しいテーマについての議論を深めるきっかけになればと思います。

座談会

駒場の二〇年

東京大学の前期二年間の学部教育を担う駒場キャンパス、教養学部。過去二〇年間の変化を振り返りながら、教養学部の抱える問題点、そして今後、大学院重点化のなかで教養学部のあるべき姿を語っていただく。



佐藤　本日は東京大学の前期教育を担っている教養学部、すなわち駒場キャンパスのこの二〇年の移り変わりを話していただこうということで、三人の先生にお集まりいただきました。

私自身は七〇年代初頭に駒場の学生で、ちょうど二つの世代のあいだにいました。一方に旧制高校の伝統を引いて文学や思想というものに憧れている世代。もう一方に、私自身もそうでしたが、ポップカルチャーにひかれる世代。それは七〇年代に入ってからの現象で、時代が進むと後者がグッと増えます。さらにこの一〇年、欧米のポップカルチャーに惹かれていた一八、九歳の人たちが、今度は日本の新たなイメージ商品のなかに取り込まれていく。洋楽よりもJ-popといわれるような音楽を聞き、男子も女子も美容院に足しげく通い、そういう意味ではある程度洗練された学生たちが増えはじめました。

駒場の教官については、ここ二〇年、いわゆる近代的なきっちりした学問よりも、「脇」を見るというか、以前には扱われなかった対象を扱うような教官が増え、学問のスタイルが、時代の流れに応じて、よりフレキシブルになった。学生のほうでも、かつてのように非常にコントロールのきついところで一生懸命に点を取るという意味での学力は、点数化してみると落ちている。しかしそのかわりに何か学生が別の能力を、あるいは可能性を身につけているように思えます。

樺山　以前の大学の教室では話題にならなかった事柄も学生の関心を引き得るし、また独特の感性、能力を持っている人間がいることがはっきりわかってきましたよね。よく言われる言い方をすると、知のエンターテイメント化がいろんな形で実現したわけです。そのことは大変よいことだと思っていますが、その学生の多くが本郷に進学してくるときに、駒場で発見したエンターテイメントのおもしろさをどう引き継いだらいいかで、学生、教師ともにかなり当惑しています。知のエンターテイメントは入口としてはおもしろい。でもあくまでも入口であって、それを学問にするか、あるいは社会的能力の養成につなげるか、どうしたらいいかわからないまま本郷の二年間が終わったという学生がかなりいて、私たち本郷の教官もその対策を考えなければいけないなと思っています。

岡本　私が問題だと思っているのは、すべてにおいて二極化が進んだように見えることです。興味を持つ学生は色々なものに興味を持ち、興味を持たない学生は何に対しても興味を持たない。勉強する学生はとことんし、しない学生は何もしない。これもやはりここ二〇年の学生の気質の変化ということでしょうか。われわれが教育を考えるときに、相変わらず平均レベルにターゲットを置き、この辺が真ん中であろうと仮定して考えますが、私の印象では、学生は二極化してしまっていて実は真ん中には誰もいない。

樺山　それから、東京大学独自の制度のこともありますね。つまり、ほかの大学と違って東大には駒場と本郷という地理的にも一時間離れた二つの単位があり、大多数の学生は駒場を二年やって本郷を二年やる。こういうスタイルを取っているところは日本の国立大学のうち本当にわずかしかない。国立大学は、少数の例外を除いてすべて教養部を廃止しましたが、東大の二つの単位はそのまま残りました。そのことの功罪はいろいろあるはずですが、それが学生にどういうインパクトを与えているのか。そこから来るデメリットをどう救済するのかということも含めて、これはとりわけわれわれの大学に固有の問題です

ね。

佐藤　駒場では九三年に大幅なカリキュラム改革が行われ、これとほぼ同時に、大学院重点化が実現しました。教官は全員大学院に所属し、そこから一、二年生あるいは三、四年生に下りていって授業をするという形態に変わったわけですが……。

岡本　改革は、もちろん一〇〇パーセントうまくいくことはない。私たちは今、全学で教育について色々話し合いをしているのですが、そういう場でも、たとえば、本来駒場で勉強してこなければいけないことを勉強していないなどといった議論が出ています。

　しかし、問題点は色々あるけれどもトータルにはこの改革は評価されているのではないでしょうか。まず、いろいろ工夫をした。たとえば英語Ⅰは、学生はおもしろいと言っているし、先生もおもしろいと言っている。これはいいと決まっているわけです。一方、たとえば理系では、学生にやる気がないとか、生物を一回も勉強したことがない、生き物に一回も触ったことがないという学生が医学部に来るようになった。もっとも、これはさらに大きな問題で、駒場の二年間がどうこういうだけのことではないのですが……。

樺山　駒場の授業改革はかなり広範で、しかも継続的に取り組んでおいでになって、私たちも大変敬意を持って感服しています。特に佐藤さんやそのほかの方々がお作りになった『The Universe of English』のシリーズなど、超人的でなくても、教官がある程度の力を投入すれば授業は変えられるという一つの代表的な事例で、非常にいいインパクトを残しています。

　ただ、いくつか問題がまだ残るなという感じがありますのは、たとえば駒場の英語教育ですが、文学部というごく限られた範囲内で言うと、進学してくる学生の語学力、とりわけ読解力は徐々に落ちているというのが、私たちのかなりの共通認識です。また、駒場に初修外国語というのがありますが、そういう英語以外の外国語についての意欲や達成度が確実に落ちているという気がします。

　本郷でやっている文科系の学問、ことに文学、思想、歴史系などは、いずれも言葉の読解を前提にしますが、そこから見ますと、基礎的な学力が十分に養成されているかと言うと、かなり疑わしい。それはこういう改革をされたからということではおそらくないのであって、学生自体の力の投入の仕方の様式が変わってきたからだとは思いますが、そこのところにやはりまだ手を入れ直す余地があるのかなと思います。

佐藤　世の中の大きな動きと連動する問題ですが、確かに読解能力が落ちているということを私自身も観察しています。

工藤　日本の社会全体が「ニーズ」という言葉を掲げていて、実践的なスキルという課題に学生は押し流されがちです。その力学にどうやって対抗していくのかが大きな問題ですね。一つには今度の改革のなかで、必修の単位数を減らしたということがあります。その一方で、初修外国語ではインテンシヴ・コースというのを作りましたから、そこの学生は満遍なく実践的なスキルと読解力を身につけられます。それから、必修を減らした分、国際コミュニケーションという枠で、特徴のある自由選択の授業を展開しています。

　ただ、新しい外国語を使って、本気で何かを考えようという授業に、いったい何人来てくれるかです。自由選択ですから強制力は無くなります。したがって今は、基本教材をどうするのかというレベルで新たな構想を練っています。英語とちがって、初修外国語では、まず単語を知らないわけだし、高校までにちゃんと世界史をやっていない学生も多い。だから、近づくべき素材に非常に距離感を持ってしまいます。これは社会的な問題ですが、国際化を英語化と取り違えているジャーナリズムと、英語さえ通じればという親たちの影響を受けてきた学生は、使えない初修外国語にどんな意味があるのかと考えがちです。

　ただ、そういうこととは別に、駒場では今二三カ国語の外国語の授業が展開されていて、とにかく触れてみたいという学生は非常に多い。第三外国語まで履修する学生はのべ人数にして三人に二人。理系の学生と文系の学生に差はありません。では、彼らをどう教育できるのか。私は思考の方法を学ぶシステムとしての語学教育があると思うのです。一つの単語にどのような文化的な意味があるのかというような話を、東大の学生は面白がって聞く。英語とはまったく違った発想、違った思考法で世界を見るとどうなるのか、という問題に、それなりの興味を持っています。

樺山　駒場で二三カ国語学習できるというのは、外国語系大学を別にしますと、とてつもない数字です。私の学生時代はたぶん一〇以下だったと思います。私はそこで七つ勉強しました。その後、その七つをいまでも全部使っています。あれがなかったら勉強する機会がなかったと思うんです。だから、ペルシャ語ですとかアラビア語ですとか、身につかないかもしれないけど、ともかく一度アプローチしてみたいという学生に対して、その制度が整備されているということは、大学側としては大きな努力を払っているのだと思います。

工藤　初修外国語の教育が大変なのは、すぐに役に立ったかと問われると困る点です。樺山先生でもないかぎり、普通の学生は、進学先でペルシャ語なんか使ってはいないわけです。「一生もの」と考えてもらいたいですね。外国語に限らず、教育は長期投資です。必修の外国語でさえそれぞれの言葉を専門にしなければ、やはり使わないですよね。ですから卒業時のアンケートでは、初修外国語は役に立たないという数字が出てしまう。

樺山　その先はわかりませんよ。

工藤　その先、やはり世界に出たときに、複数の言葉を学んで、世界の多様性を知っておくことの大切さが、きっとわかってもらえると思います。

佐藤　外国語以外に目を向けますと、九三年のカリキュラム改革でこちらも大きく様変わりしました。それ以前は人文、社会、自然というような分け方だったのが、六系列の総合科目のほか研究の方法や論文の書き方、情報機器関連の授業も揃っていて、私が学生だった頃と比べると、すごくうらやましい状況になっています。ただ、それが、結果としてどう出ているかはちょっと見えにくい。

樺山　別の言い方をすると、多彩な森の中で迷子になっている。初めから地図を持っている人間が森のなかに入れば、どの木とどの木を見て歩いて、どこでキノコを拾ってというふうに考えられますが、地図を持たない人間が入るので、その結果迷子になってしまう。木は何本か見たけれども実はそれをみんな自分の認識に整理できず、気がついたら外に出ていた、というようなことがあるかもしれません。

佐藤　いかに〝頭よく〟立ちふるまうかということに意識が行きがちで、その点、先輩からの情報も充実していますし。

岡本　積み上げの部分が多い理系にとって、自由選択の出来る総合科目のシステムが問題になる場合があります。例えばフランス語やフランスについて勉強しようとするとき、デカルトから入ってもいい、サルトルからでもいい。いろんな入口があるのに、理系では、デカルトがわかっていない人は何もわからないという部分があります。そうすると、ある部分が必修から外れて総合科目へ回ったために、学部で先生も学生も真っ青、ということはいくらでも起きる。自由を増やすと一面ではそういう問題が出てくる。

　ただ、カリキュラム改革の問題というより、情報をわれわれがちゃんと流していないことが問題なのかもしれない。情報を与えるということについて、全学的に努力が足りないのではないでしょうか。たとえば、〇〇学部の〇〇学科でちゃんと単位を取って卒業するためには、駒場のこういう授業を聞いて理解していないと駄目ですよ、というような情報が、ガイダンスで学生に十分には伝わっていない。この問題には全学的に取り組む必要があると私は思っています。

樺山　教養学部をほかの大学のように解体せずに維持し、しかも間に物理的に一時間の距離があるというこのシステムは、アフターケアも含めて、情報整備と情報公開抜きではもちませんよね。それぐらいのエネルギー投入は私たちの責務でしょうね。

岡本　東大が抱えている最大の矛盾は、大学院を重点化した最初の大学である一方で、学部教育について最も特徴のある大学にもなったということです。日本で他に類型がない大学です。この大きな矛盾を私たちはどう解決するのか。これから教育を重視した「学部重点化」をやらないといけない。

佐藤　それには私たちに相当な覚悟が必要だということですね。

（二〇〇〇年七月一八日）

岡本和夫（おかもと・かずお）
大学院数理科学研究科長

樺山紘一（かばやま・こういち）
大学院人文社会系研究科教授

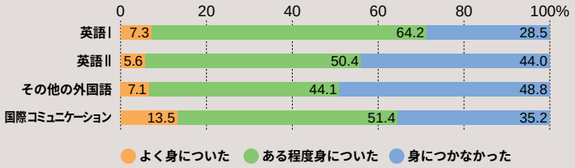
工藤庸子（くどう・ようこ）
大学院総合文化研究科教授

佐藤良明（さとう・よしあき）
大学院総合文化研究科教授

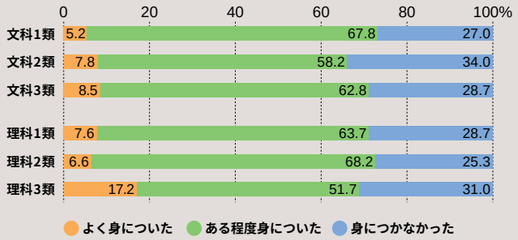
教養学部における語学教育に関するアンケート

大学総合教育研究センター1998年調査より

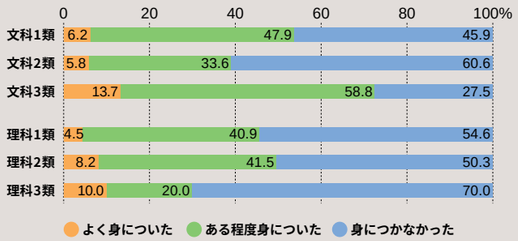
Q1　「英語Ⅰ」と「英語Ⅱ」、とそれ以外の外国語、選択科目として「国際コミュニケーション」がありますが、それぞれどの程度身につきましたか。



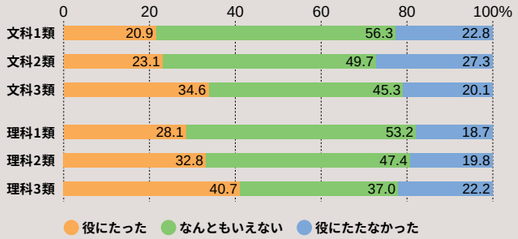
Q2　「英語Ⅰ」は身につきましたか。



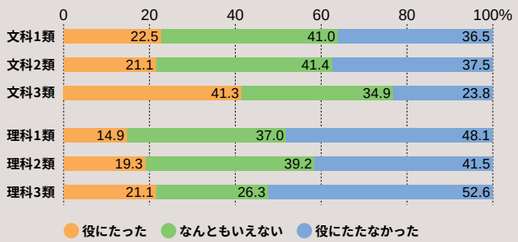
Q3　その他の外国語は身につきましたか。



Q4　「英語Ⅰ」はその後の学習の基礎として役にたちましたか。



Q5　その他の外国語はその後の学習の基礎として役にたちましたか。



特集 東京大学教育における

学生の一週間

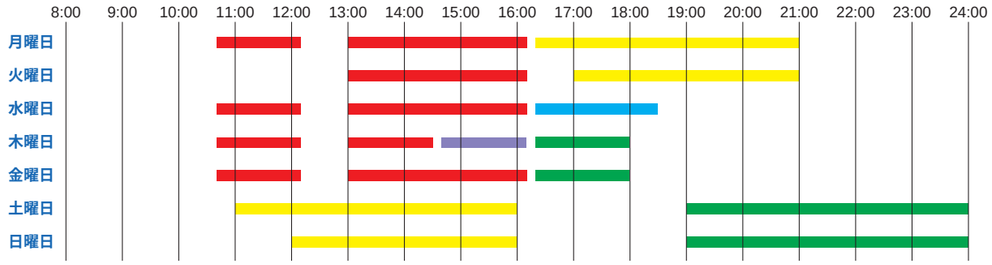
東京大学で学ぶ二万人以上の年齢や性別も様々な学生たちは、一体どんな日常生活を送っているのでしょう。学生の数だけの日常生活があることは確かですが、少なくとも「学生」であるからには、勉学がその生活の中でかなりのウェートを占めているはずです。学生たちはどのくらい勉強しているのでしょう。今回の特集に際して、編集委員会は何人かの学生にインタビューを試み、アルバイトやデートなど学生のプライヴェートな生活には立ち入らず、勉学とサークルという「学生の本分」に限って、その生活ぶりを公開してもらいました。ここでご覧に入れるのは、彼らが言う「典型的な一週間」です。これを見て皆さんはどのような印象をお持ちでしょうか。「勉強時間が少なすぎる」か、それとも「こんなにまじめに勉強しているはずがない」でしょうか。社会人は自らが学生であった時を思い出して、他大学の学生は自らの生活と比べて、これから学生になる人は自らの将来に思いを馳せて、眺めてみて下さい。

海外の学生と比べて、日本の大学生は勉強しないと言われている。受験から解放された学生たちは、自分の好奇心と感性をいかして学べる大学で、はたしてどのくらい〝個性的〟に勉強しているのでしょう？

講義　実習、演習、実験　自主ゼミ　自習　サークル

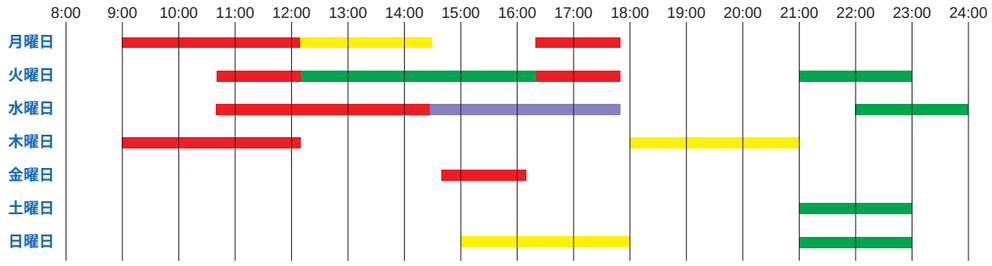
文科２類（1年生男子）

火：1週間の中で一番気を抜いている日。大学さぼって何か見に行くとしたらこの日。　水木：段々朝が眠くなってくる。ヘビーな科目が多く気合い必要。　金：ここを乗り切れば、ということで意外に元気。ただし最後の講義まで出ることほとんどなし。　週末：大体がバンドの練習。歌って、しゃべって、みんなでご飯食べて……。



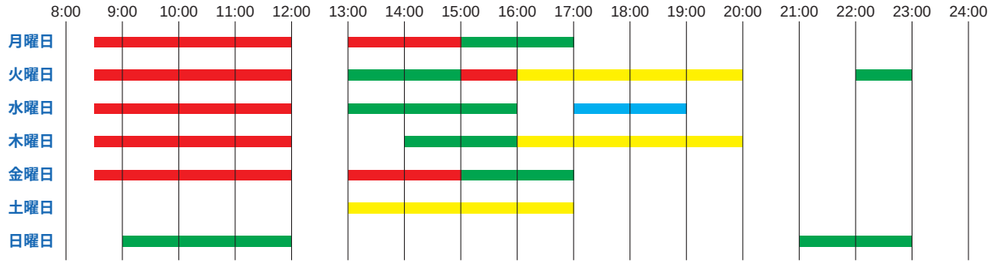
理科２類（1年生女子）

火：昨日のカテキョ（家庭教師）でちょっと疲れ気味。　水：実験だー！　そのあとカテキョか。がんばろ。　木：今日は手話だ。先週やったの、何だっけ……？　土：休みだ。でも、朝はいつもどおりに目が覚めるんだよね。どうせ起きてるんなら何かしよう。自転車にでも乗ってどっかいこうかな？　日：疲れはとれた、かな？



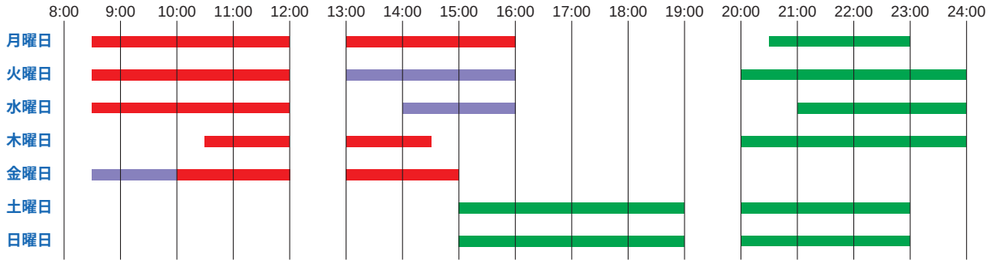
法学部（3年生男子）

月：一日3コマあるとつらい。　火：サークルで運動するのが楽しみ。　水：家に帰るのが午後８時過ぎ、腹が減る。金：つらい一週間が終わって解放感。　土：勉強しない日。



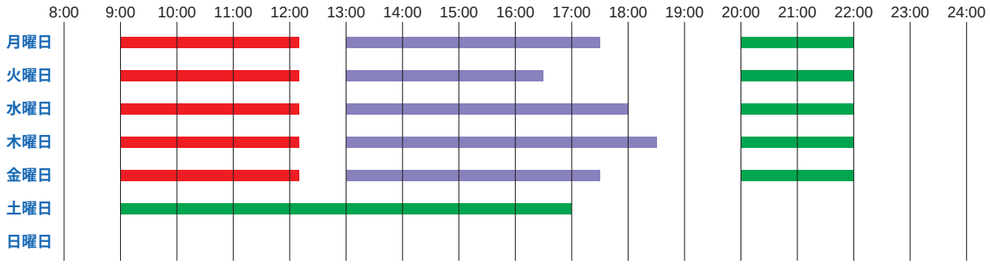
工学部（3年生女子）

平日はほぼ毎日1限〜4限まで授業。夜はたいてい次の日の課題をやらなければならないので、あまり自分の時間はない。土曜日は比較的ひま。余暇は犬の散歩や買い物など。日曜日もゆっくりしたいところだが、たいてい、やり残している課題に追われる。



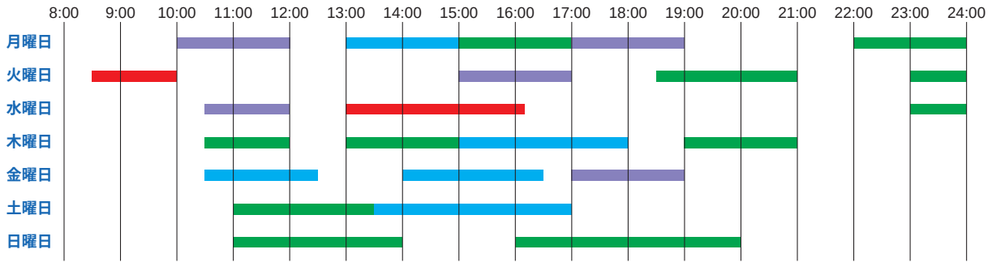
医学部（６年制４年生）

月：衛生学実習はいくつかのグループに分かれて行われており、グループごとにスケジュールが違う。　水木：病理学実習のスケッチに６時すぎまでかかる。　土：医学図書館で一日勉強、医学図書館は日曜も開けてほしい。



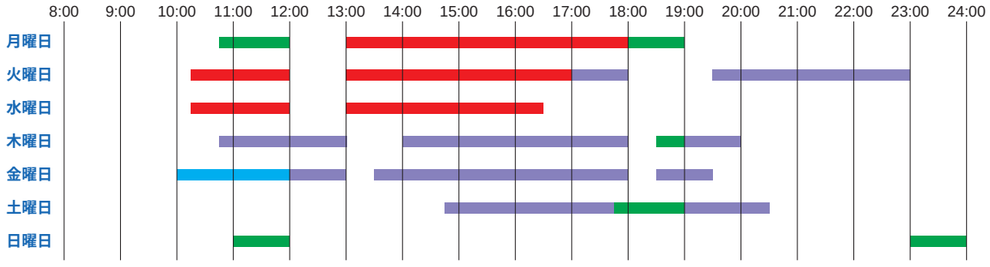
人文社会系修士１年生

日々の予習で手一杯。外国史専攻なので、語学の修得のために院生同士で勉強会を開いている。授業は刺激を受けることが多くて楽しい。



新領域修士１年生

月：午後は授業の日。　火：実験が終わる前に終電の時間が来る。　水：研究室で飲み会。下っ端なので夕方から準備。日：月曜日の授業の課題を少しやる。「この週は火／水が集中講義の週でした」



魅力ある授業

教師の教えようという意気込みと学生の学ぼうという意欲が出会ったとき、そこに「魅力ある授業」が生まれる。ここでご紹介するのは、本学で数多く見られるそのような「幸せな邂逅」のほんの一部です。

特集 東京大学における教育

「魅力ある授業」の定義は簡単ではありません。テーマ、教師、環境や施設、友人、等々、人によって魅力を感じる部分は様々だからです。それでも、多くの人が魅力的だと感じる授業は確かに存在します。今回の企画では、まず各学部・研究科の広報委員からこのような「魅力ある授業」の推薦を受け、その授業とは直接関係のないレポーターが先生の許可を得た上で実際に授業に出席し、その魅力を探りました。彼らの報告からそれぞれの授業の魅力の一端が伝わってくるはずです。

大学院工学系研究科
竹内佐和子助教授
（たけうち・さわこ）

大学院工学系研究科
建設マネジメント特論E

大学院工学系研究科社会基盤工学コースの授業は、すべて英語で行われています。その一つ、「建設マネジメント特論E」担当の竹内佐和子先生は、フランスのビジネススクール副所長、日本の民間シンクタンクの主席研究員という経歴をお持ちです。

六月の梅雨の晴れ間に竹内先生の授業にお邪魔してみると……授業の冒頭、先生はいきなり、その日の午前中に出席された政府の審議会で議論された「横断型の事後チェックシステム」というキーワードを、学生にぶつけました。ちょうどこの日のテーマにあった話題だったので、学生もすぐにのみこめたようです。

「建設マネジメント」といっても、竹内先生担当の講義は、地域開発、インフラ産業、街づくりといったところに焦点があてられます。そこには国際問題、都市経営、住民のニーズの解釈なども含まれ、いってみれば、「生きた社会のニーズに応じたインフラ開発と地域づくり」を目指しています。

英語による授業とあって、大学院生四〇人のうち、およそ半分が外国人留学生、半分が日本人学生です。インドネシア、ミャンマー、スリランカなどアジアから、イタリア、アルバニアなどヨーロッパから、そして南アメリカからもと国際色豊かです。

学生に竹内先生の授業の魅力を尋ねてみると、「純粋なビジネスと土木工学のブリッジ（橋渡し）を話してくれる」「土木は社会に根ざすべきものと思うが、社会で今、起こっていることを教えてもらえる」「具体的な事例をいれて説明してくれるので、わかりやすい」「海外での経験を生かして話してくれる」「フレンドリーな雰囲気があるので、何でも質問しやすい」など、先生のキャリアとお人柄が、国籍を問わずよく学生に伝わっているようです。もちろん、日本人の学生の中には、専門用語がわからず、時々おいてきぼりになると白状する人もいましたが。

それでも先生は、日本人にとっても、英語での議論がどういうものかを学び、英語が身に浸透していく成果がみられると、おっしゃっていました。

最近の東大生はと、とかく言われがちですが、竹内先生の目には、新しい問題に自分からとりくもうとする学生の姿勢がみられ、教える側としても授業をエンジョイできるそうです。土木や建築が社会のニーズの上になりたっているように、大学にも、世の中のニーズに追いつくために新風を吹き込んでいる、そんな印象をうけた授業でした。

（大学院人文社会系研究科学生　小室広佐子）

竹内先生の授業で使用される資料

竹内先生の著書

教養学部
基礎演習

大学院総合文化研究科
長谷川壽一教授
（はせがわ・としかず）

東京大学に入ったばかりの一年生対象の授業に「基礎演習」と呼ばれるものがある。一体どんな授業なのか、タイトルだけでは見当もつかない。その実態を探るべく、駒場に出かけてみた。「演習」というからには、物理の問題を黒板で解くようなものかと想像していたが、授業の実態は予想とは大いに異なっていた。「ミニ学会」とでも言えばよいだろうか。「民族紛争とジェノサイド」「異文化との出会い」「芸能―大衆文化」「アジアの文化と社会」という四つの大きなテーマが最初に与えられる。学生はこの中のどれか一つを選び、そのテーマに沿って各自が興味ある題材を定め、その題材について調べた結果を報告する。

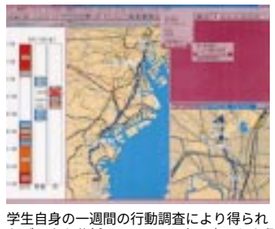
私がお邪魔した回は、「芸能―大衆文化」の大テーマの下で、「二人のヴィーナスの図像学」「ＮＨＫの光と影―影は知られているか」「陶磁器について」という三つの報告が行われた。必ず使うことになっているＯＨＰを駆使しながらの一五分程度の発表が終わると、質疑応答の時間である。厳しい、核心をついた質問が次々と続く。でも、中には「あなたのお勧めの陶磁器は」などという場が和らぐ質問もある。長谷川教授に授業の意図をうかがったところ、通常の「一方通行の授業」とは違う形で、自ら問題意識を発掘し、それを他人に伝える能力を養うところにあるとのこと。自らの興味に則してテーマを定めて調査し、その結果を発表するという形式は、さながら学会や卒論発表を思わせる。一年生がこれからの学生生活で必要となる問題探究能力の開発やプレゼンテーション能力の向上のために適した授業形式である。ある学生は「発表するときは緊張するけれど、面白い授業です」と言う。質疑応答の活発さがその証明だろう。「教わる授業」ではなく「教える授業」。ひと味違う授業の楽しさを満喫した。

（大学院総合文化研究科学生　小林知勝）

長谷川先生も執筆された、授業で使用されるテキスト

自動車移動軌跡データ収集実験風景（お台場にて）

自動車移動軌跡データ収集実験により得られたGPSデータをGIS上に表示したもの



学生自身の一週間の行動調査により得られたデータを分析用GISソフト上に表示した例

面白いのは、まずはじめに学生自身が自分の生活について調査するということです。自分がこの一週間どこをどのように移動したか、それぞれの場所でどんな行動をしたかが実際に新技術を使ってまとめられ、皆の前で報告されるわけですから、悪いことはできませんね。こうして自らの行動を分析する中で各人が抱いた問題意識が、次の新たな課題の設定へとつながってゆきます。調査や分析の方法は、自分自身の体験に基づいて明確に理解していますから、次に学生たちが設定する課題の内容も、ユニークで実際的です。自分で歩き回ってデジタル技術を利用した東京の観光地の散策マップを作成すること、自分の居住地区における渋滞に関する調査をドライブしながら行うこと、などなど。

現在の受講者は約一〇名。社会文化環境学を専攻する学生と空間情報科学を専攻する学生が相半ばしています。学融合を目指して新しく生まれた大学院研究科だけあって、文化、システム、技術など、様々な方面に関心を持つ学生が集まっています。和やかな雰囲気の中で、日々進化しつづける高度情報通信技術が今後社会にどのような展開をもたらすかという二一世紀の重要課題が、多面的に真剣に議論されています。

（大学院人文社会系研究科学生　武田みゆき）

大学院新領域創成科学研究科
環境空間情報学演習

大学院新領域創成科学研究科
原田昇教授
（はらた・のぼる）

環境に配慮しながらも無駄を省いた都市の交通計画はいかにあるべきか、移動を効果的に行うためのシステムとはどのようなものか。この授業の目的は、現代社会が抱えるこのような重要問題を解決するために必要な基礎的技術を身に付け、その応用を考えることにあります。実際の授業では、GPS(Global Positioning System)やPHS(Personal Handy phone System)といった物体の位置を知るための先進的な技術が紹介され、学生はこれを用いて人や車の動きをデータとして収集・分析します。

薬学部
薬理学Ⅱ

大学院薬学系研究科
松木則夫教授
（まつき・のりお）

「薬理学Ⅱ」は、薬学部三年前期の必修科目です。「薬理学Ⅰ」は末梢器官に関わる部分を学ぶのに対して、「薬理学Ⅱ」では脳をはじめとする中枢器官に関係のある薬学を学びます。それぞれ二、三人の先生方が分担され、講義形式で授業がすすめられています。

この日は、「パーキンソン病の治療薬」というテーマで講義が行われました。松木先生は、大学の授業としては珍しいと思えるほどに丁寧な板書をされつつ、適度に早いテンポで説明をなさっていました。ときおり雑談を交えられるのですが、雑談とはいっても決して「無駄話」ではありません。例えば、今回の授業では「パーキンソン病は、主に中高年で発症するが、まれに若くしてこの病気にかかる場

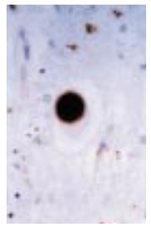
合もある」例として、「バック・トゥ・ザ・フューチャー」に主演した俳優マイケル・J・フォックスの名を挙げておられたり、いくつかある病因のひとつとして、ボクシングの外傷によって発症したモハメド・アリの例を紹介されていました。このような、内容に関わる若干「柔らかめの話」が加えられることで、授業のよい流れが生み出されているように思われます。

授業終了後に、松木先生にお話を伺いました。「薬理学Ⅱ」を講義するにあたり、心がけておられる点について質問したところ、「三年生が対象なので、いきなり実戦的な難しい内容で始めるのではなく、薬学に興味をもってもらえるよう、なるべく解りやすく説明しようと心がけている」とのお答えが返ってきました。これは、言い方を変えると、「東大生は、教科書・参考書等に載っているような基本的知識は、独学で身に付ける能力をみな持っているのだから、常識的な知識だけではなく自分自身で考察、検討してみる部分を、講義の一部に交えている」ということだそうです。

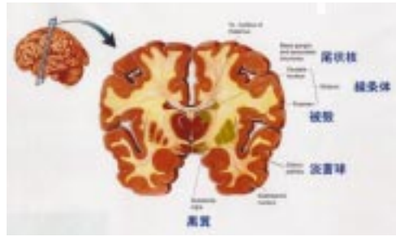
学生の感想は、「板書が丁寧でわかりやすい」「説明が系統立っていて、理解しやすい」。また、「適度に余談が入っていて面白い」との感想も、かなり多数を占めていました。松木先生の魅力として、「一つの専門分野だけにとらわれずに、それに関連して色々な分野からのトピックスを総合的にからめて供給できる、幅広い視点を持っているところ」と表現した意見は、まさにこの「薬理学Ⅱ」の特徴＝松木先生の意図をうまく表しているのではないでしょうか。

教授も学生も、非常に前向きに授業に取り組んでいる、そんなある種の一体感を感じられた授業でした。

（東洋文化研究所事務補佐員　西園寺彩子）



パーキンソン病、中脳のLevy小体（左）
パーキンソン病に関連する脳部位（下）



文学部
美術史学演習―イスラーム絵画史

東洋文化研究所
桝屋友子助教授
（ますや・ともこ）

この授業を担当する桝屋友子先生が学生だった頃、日本の大学にはイスラーム美術史の専門家がいなかったそうです。このため、先生はニューヨーク大学の大学院に出かけ、そこで博士号を取得されました。現在でも、我が国の大学で開講されているイスラーム美術史の本格的な授業は、この桝屋先生のものだけです。それだけでも、この授業のユニークさは際だっています。アジアやアフリカの広い範囲に拡がるイスラーム世界では、写本絵画と呼ばれる独特の美術のジャンルが発展しました。それがゼミの中心テーマです。私がお邪魔したのは、一二、三世紀にペルシアで活躍した大詩人ニザーミーの「ハムサ」という作品の写本絵画をあつかった日でした。「ハムサ」とは「五部作」という意味で、ニザーミーの五つの傑作詩編をまとめた人気作品ですが、その写本にはしばしば美しい挿絵が挿入されたとのこと。

学部生・大学院生あわせて一五名ほどが参加するゼミは、教室の前に白いスクリーンが、後ろに二台のスライド映写機が用意されてはじまりました。「ハムサ」の五つの詩編それぞれについて、まず学生が内容や背景などを報告し、つづけてその写本の挿絵を桝屋先生がスライドで紹介し、説明をくわえます。

各詩編の内容自体もおもしろいのですが、くわえて先生がスライドを使って具体的に示される絵画の分析が大変興味深い。「二羽のフクロウの会話」「水浴する王女をかいま見る王」のようにくり返し取り上げられる同一モチーフが写本間でどのように異なっているか、口元に人差し指を当てるのが「驚き」のポーズであること、後代になって遠近法の影響をどのように受けたかなど、先生は素人にも分かるようにゆっくりと、しかし明快な口調で説明していかれます。毎週一五〇枚ものスライドを準備し、リモコンを二丁拳銃のように駆使されながら話される先生のご苦労が偲ばれますが、一観衆としては、一幅の絵巻物をみる思いで楽しんでしまいました。

（大学院人文社会系研究科学生　毛里裕一）

イスラム美術の傑作・王のモスク入口大門（右・下）
大詩人ニザーミーの“ハムサ”という作品の写本絵画（左）

教育学部
身体教育学概論Ⅰ

大学院教育学研究科
武藤芳照教授
（むとう・よしてる）

子供から高齢者までの身近な話題の中から身体を考える教育学部の人気授業があるという情報を入手した。聞けば今回の授業のテーマは「寝たきり老人」と「老人の転倒・骨折」で、さらに授業の中で「高齢者セット」なるものを装着して身体が自由に動かない状態を体験するとのこと。二〇歳を過ぎたばかりの学生たちがこのテーマにどのような反応を示すのだろうか。

講義前日の武藤教授室を訪れると、ちょうど講義で配布する資料を作成中。今回の授業のために用意されている資料は一つひとつ武藤教授自身が時間をかけて選定したものだそうだ。しかし「一番重要なのは授業中の学生の意見ですよ。彼らは時に非常に面白いことを言いますから」と武藤教授。ますます学生の反応に興味が沸く。

当日は朝早い授業にもかかわらず、ほとんどの学生が授業に出席。学部の授業であるため、多くの受講生が教育学部の三年生だが、大学院学生や他学部の学生の顔も交じる。中には人間の身体のしくみがわからなければ建築ができないから、という理由で工学部の建築学科の学生が受講することもあるそうだ。これは東大のような総合大学ならではのメリットだろう。

まず今回のテーマについて韓国からの研究生である吉愛欄さんと大学院学生の小久保奈緒美さんの二人の学生が発表を行った。吉さんは日本の高齢化について統計を用いてわかりやすく解説し、小久保さんは老人の転倒について他の学生の意見や実演を交じえながらの説明を行った。発表方法は発表者の裁量に任されているが、過去に「たばこ」をテーマにした際にはこの発表のために渋谷の喫茶店でアンケートを行ったり、「酒」がテーマの時には飲酒をしたときの体温の変化を寮で計測したり、という体あたりの調査を行った発表者もいたらしい。この授業の魅力の一つは武藤教授が学生の発表の後に行う補足・解説。理論的で、かつ教授自身の豊富な経験に裏付けされたその解説は、学生たちを飽きさせない。また、解説は学生に当てながら進められていくので、学生たちは自分たちの意見を発表する場を常に与えられ、かつ他の学生の意見を聞くことによって新しい知見を得ることができるのである。

さて、二人の発表が終わるといよいよ「高齢者セット」の登場だ。今回実演するのは勇気ある男子学生。まず、装着した感想は、「関節が曲がらないし、腕が上がらないのが辛い。あと視野もかなり狭いし、色の識別も難しい」。武藤教授によると、実際にもお年寄りは身体が思うように動かないため転倒が起こりやすく、また視野が狭まったり、色の識別が困難なことによる信号での事故も多いとのことだ。次に「高齢者セット」の実演は廊下での歩行や階段昇降に移り、授業の終了時刻を過ぎても他の学生たちからたくさんの質問が飛ぶ。最後にこの授業についての魅力は、「この授業で取り上げる題材はすべて生活密着型というか、身近な話題で親しみやすいですよ。浅く広くという感じで自分の身体に関しての知識もつきます」とのこと。しかし何より、学生たちの輝いた目や学ぼうとする姿勢が、この授業の魅力のすべてを語っているような気がした。

（総務課広報室　八木橋麻美）

「高齢者セット」を装着しての実演（上・右）
厚生年金病院転倒予防教室にて（上・左）
武藤先生の著書、授業で使用されるテキストなど（下）

工学部
無線通信応用工学ナビゲーションシステム（2）

大学院新領域創成科学研究科
森川博之助教授
（もりかわ・ひろゆき）

携帯電話はもはや私たちの生活必需品となった感があります。森川博之助教授が三、四年の学生向けに開講している無線通信応用工学の授業は、携帯電話のみならず、無線通信というシステム全般の恐ろしいほどの可能性を知り、それを社会にどう応用して行くかを考えようとするものです。ある意味で、これからの社会のあり方を規定する最先端の技術の解説を聞ける、またとない機会だと言えるでしょう。今回、私が見学した授業は、「ナビゲーションシステム（2）／GPS（Global Positioning System）」です。GPSとは、ナビゲーションサテライト（人工衛星）から電波を送って地上の自分の端末の位置を精密に測るシステムのことです。身近な例としてはカーナビがありますが、そのような移動体のみならず、地殻変動などもこのシステムを使って調べることができるそうです。工学部の専門課程の授業ですから、文科系の人間が理解することはたやすくはありませんが、先生のエネルギッシュな語り口と学生たちの熱心な聴講ぶりが強く印象に残りました。

先端的な試みの一つとして、この授業は、遠隔地点にインターネット配信を行っています（http://www.soi.wide.ad.jp/class/20000002/）。インターネットを用いた高等教育の在り方を探ることを目指した実験であり、実験の参加者はリアルタイムで授業を聴講することができるとともに、インタラクティブに質問をすることもできます。また、授業風景は録画されているため、後でダウンロードして聴講することもできます。教室だけが授業の場ではないのです。

（大学院人文社会系研究科学生　近藤真里子）

森川先生の授業風景をビデオに収録

授業をインターネットで中継するシステム

大学院教育学研究科・教育学部

Graduate School of Education and Faculty of Education

教育は、子どもの現在と将来、社会の現在と未来に関わる営みです。それが歪んでいるなら、子どもの将来も社会の未来も危うくなります。そうならないためにも、豊かな教育を実現していくことは、私たちの重要な課題であり責務です。

教育がつくる日本の未来

世紀の転換点にあって、「子どもの問題」があらためてクローズアップされています。校内暴力、いじめ、不登校、学級崩壊、学力低下、援助交際などが、この二〇年ほど急速に問題化してきました。そして「一七歳の犯罪」。

一連の問題事象は、人間形成の基本が深いところで歪み始めているという印象を掻き立ててきました。その印象がそれほど重視する必要のないものなのか、それとも由々しき事態の予兆なのか、今のところ定かではありません。しかし、学校教育のあり方を含めて、現代の生育環境の歪みを問い直す契機となってきたことは確かです。

教育は、子どもの現在と将来、社会の現在と未来に関わる営みです。それが歪んでいるなら、子どもの将来も社会の未来も危うくなります。そうならないためにも、豊かな教育を実現していくことは、私たちの重要な課題であり責務です。

〈教育〉〈学習・成長〉に関する学際的・総合的研究

教育学は、そういう営みとしての教育を理論的・実証的に研究する学問です。およそ〈教育〉という言葉で想起されるあらゆる現象、子ども・人間の発達・成長や生活・学習に関わる諸現象を対象として、その形態・構造・メカニズムや機能・性質・意味を究明し、もって教育の実践・政策や社会生活の改善に資することを目的とする学問です。

その意味で、教育学は対象によって成り立つ学問であり、教育学に固有の方法があるわけではありません。人間形成を指針とし、哲学、歴史、社会学、経済学、文化人類学、心理学、行政学、生理学などの方法を駆使して、教育現象を解明しようとする学問なのです。

したがって、大学院教育学研究科のスタッフが手がけている研究も実に多彩です。たとえば、イギリスにおける体罰の歴史を一八六〇年の学校体罰史事件を手掛かりに思想史的に考察した研究、日本におけるしつけの歴史や青少年問題の展開に関する研究、学歴社会の生成・展開や学校教育と労働市場との関係に関する研究、文化的マイノリティの適応問題をアイデンティティ形成・**葛**藤という視点から解明しようとする研究、子どもの学習・発達のメカニズムや学力形成の問題に関する認知・学習・発達心理学的研究、青少年の心的障害・関係性障害やその解決への心理臨床的援助に関する研究、カリキュラム・教育方法・教師文化や学校文化に関する実践的・理論的研究、教育行財政やボランティア活動、身体のしくみや運動能力の形成に関する生理学的研究、体育・運動・スポーツの効能とあり方に関する研究、学力・心理・身体機能の測定や関連データの統計学的分析法の開発など、きわめて多岐にわたって多彩な研究が進められています。

大学院留学生や外国人研究員も多く、国際的な研究交流も盛んです。

変動社会における青少年問題（暴力・非行・いじめ等）に関する日米会議（1999年2月26日〜28日）
主催：大学院教育学研究科附属学校臨床総合教育研究センター

大学院教育学研究科・教育学部の組織と目的

大学院教育学研究科・教育学部は、左表のような六コース・一附属センターを擁して、研究・教育活動を進めています。その主目的は、教員養成ではなく、教育文化の研究とその担い手の育成、及び教育研究者の養成にあります。なお、教育学部附属中等教育学校は、中高一貫教育の実践教育を進めていますが、双生児研究で世界的に誇れる貴重なデータを蓄積していることも特筆に値するでしょう。

藤田英典（ふじた・ひでのり　大学院教育学研究科長）

大学院（総合教育科学専攻）・学部（総合教育科学科）の構成

コース（大学院／学部）	教育研究分野
教育学／教育学	教育学理論、教育史（日本）、教育人間学、教育史（西欧）
比較教育社会学／比較教育社会学	教育社会学、比較教育システム論、高等教育論、比較教育学
教育心理学／教育心理学	学習心理学、発達臨床心理学、教授心理学、教育情報科学
学校教育開発学／学校教育学	学習開発学、教材開発学、教職開発学、授業開発学、学校臨床学
生涯教育計画／教育行政学	教育行政学、生涯学習論、社会教育学、図書館情報学
身体教育学／身体教育学	身体教育学、教育生理学、スポーツ科学、健康教育学
学校臨床総合教育研究センター（大学院附属研究センター）	いじめ、不登校、学力低下、情報教育など、様々の教育問題についてプロジェクト方式で学際的・実践的研究を行う。

海洋研究所

Ocean Research Institute

全国共同利用研究所として、研究船で世界の海にでかけ、地球表面積の70%を占める海洋にかんする自然科学を学際的、総合的に研究しています。国際共同研究が盛んで、大学院教育にも積極的に取り組んでいます。

海洋研究所は全国共同利用研究所として、昭和三七年に設置されました。海洋の物理過程、海流・気象の動態、物質循環、海底の地質構造・テクトニクス、海洋生物の生態学・生理学・生化学や水産資源の研究など、広範な海にかんする事象を、学際的、総合的に研究しています。本年度の改組により、六部門・一六分野となり、各分野には二名ずつの教授、助教授、助手が所属しています。

多くの国々を結ぶ海を対象にする海洋研究は、国内はもとより国際共同研究が基本です。本研究所は、海底下二〇〇〇メートルの試料を採取する国際深海掘削研究計画、海洋予報を実現する世界海洋観測システム、海洋生物資源の変動を研究する国際生態系研究、海洋の物質循環を研究する海洋フラックス計画などに、積極的にかかわっています。また、日本学術振興会の拠点大学方式による、インドネシア、タイ、マレーシアとの現地調査を含む共同研究とセミナーを実施しています。国際共同研究のために、海洋科学国際共同研究センターが平成六年に設置されています。さらに平成一二年には、海洋環境保全と海洋の利用開発を促進するため、海洋環境研究センターが設置されました。

海洋研究所の目玉はなんといっても研究船をもっていることで、船長をはじめとする乗組員も研究にかかせない存在です。太平洋の航海を主とする白鳳丸（三九九一トン）は、平成元年の建造時には世界一周も経験しています。昭和五七年に建造された淡青丸（六〇六トン）は、国内の港を起点にグアム島付近までの航海を担当しており、一一名の研究者が乗船します。

一方、昭和四八年に大**槌**に設置された臨海研究センターは、黒潮と親潮がはいりこむ地の利を得て、サケが産卵遡上する三陸海岸で、三隻の観測艇による標本の採取を行っています。毎年八〇にものぼる研究課題の遂行のため、一日あたり平均二〇人、のべ五〇〇〇人が研究に従事しています。

本研究所のもうひとつの重要な役割は、理学系研究科と農学生命科学研究科の協力講座としての大学院教育です。現在、四六名の修士課程の学生と五六名の博士課程の学生とともに、二四名のポストドクトラル・フェローと二二名の研究生が在籍しています。彼らも、指導教官とともに研究船に乗船します。

研究所のスタッフは海洋学の普及にも積極的で、本研究所が編集した『海洋のしくみ』（日本実業出版社）も好評です。本年七月二〇日の「海の日」の前後には、研究船と観測機器の公開と一般講演会の開催、横浜港での深海掘削船の公開、東京ビッグサイトで行われた「ゆめテク」ではブースを用いた各部門の紹介を行いました。

（ホームページ　http://www.ori.u-tokyo.ac.jp）
平啓介（たいら・けいすけ　海洋研究所長）

海洋研究所の部門と分野

海洋物理学部門 海洋大循環分野 海洋大気力学分野	海洋の流れや大気―海洋間の相互作用などの物理現象とその過程を、観測に基づき定量的に解明する。
海洋化学部門 海洋無機化学分野 生元素動態分野	海洋における生物および物質の特性を化学的手法により把握し、物質循環機構を解明する。
海洋底科学部門 海洋底地質学分野 海洋底地球物理学分野 海洋底テクトニクス分野	地質学、地球物理学、古海洋学などの手法を用い、海底堆積層や海洋地殻の形成と進化、プレートテクトニクス、地球内部の構造などの海洋底を解明する。
海洋生態系動態部門 浮遊生物分野 微生物分野 底生生物分野	海洋生態系における生物群集と海洋循環との関係から、生物群集の進化と適応、生態系の機構を解明する。
海洋生命科学部門 生理学分野 分子海洋科学分野 行動解析分野	海洋生物の成長・生殖・行動・環境適応などのメカニズムを、個体・器官・組織・細胞・分子のレベルで解明する。
海洋生物資源部門 環境動態分野 資源解析分野 資源生態分野	海洋生物資源の持続的利用と管理・保全のために、その生物学的特性と環境動態、さらに数量変動機構を解明する。

写真：
〈上〉研究船白鳳丸（3991トン）
〈中〉研究船淡青丸（606トン）
〈下〉附属大槌臨海研究センター

明日の研究者への期待

日本中世史・近世史、絵画史料学、歴史図像学、歴史地理学などなど、幅広い分野で活躍される黒田日出男教授を訪ねて。

黒田日出男教授

日本史研究者として幅広い分野で活躍されている史料編さん所附属画像史料解析センターの黒田日出男教授の近著『日本中世荘園絵図の解釈学』(2000年7月)には、教授の専攻が「日本中世史・近世史、絵画史料学、歴史図像学、歴史地理学」と紹介されている。ずいぶんと欲張りな専攻である。今回のインタビューでは、この欲張りな専攻の系譜を聞き、明日の研究者への期待を語っていただいた。

竜への想い

いま最も熱中している研究テーマは竜です。中世の人々がどういう風に国土を意識していたのかを、竜を通して考えてみたい。むかし金沢文庫所蔵のある絵図をみて、この着想を得ました。それと同じ様な絵図をここに掲げました。竜神信仰が全国各地にあります。たとえば竜穴のこと。竜穴には竜が棲んでいて、それぞれの穴が地底で繋がっている。中世の人々は日本の大地は穴だらけで、竜が穴を行き来していると考えていたのではないか。そして海の中には竜宮がある。竜伝説もあります。中世の人々は、神が竜の姿をとって戦争を勝利に導くと考えていました。日本の大地を支えたり、大地を穴だらけにして動き回っている巨大な竜たちの世界が日本である、と考えていたのかも知れない。近世に出回る地震の原因としてのナマズ絵も、もともとは竜でありました。右の絵図を見て下さい。竜の頭にある石に「かしまのかなめいし」と書かれています。

大日本地震之図

歴史図像学的研究へのプロセス

もともとは中世の開発史が専攻です。戦後の歴史学は発展史観を基本にした理論研究が圧倒的でした。その中で歴史地理学的方法によって現地調査を積み重ね、丁寧で正確な歴史像を描くことから研究に入りました。「田遊び」に注目したのがこの頃です。中世の民衆運動、農業技術史、民俗史の全体像を表現する貴重な史料である「田遊び」の研究は、対象や方法の斬新さとそこから生み出された従来とは異なる歴史イメージのゆえに、ずいぶんと評価を受けました。

1972年に史料編さん所に入所して、近世初期を担当することになりました。近世史の最先端の方々から刺激されて、「国郡制」の実態とは何だろうと疑問を持ち、国絵図を調べることにしました。歴史図像学に対する関心は、同時平行的にありました。それを可能にしたのは、フルカラーで出版された「日本絵巻物全集」(角川書店)です。また、絵画史料のもつ可能性を存分に発揮できるテストケースとして、中世の身分制を最初に手がけました。当時の身分は可視的なものだったからです。雑学と独習が基本でした。絵画史料論をはじめるにあたっては、そのバックグラウンドとして、美術史(パノフスキー)、構造主義、文化記号論などの文献には目を通しました。日本では山口昌男さんの仕事なども。

画像(絵画)史料分析から見えてくること

やはり中世の民衆意識がリアルに把握できるようになり、歴史の全体的把握に貢献できると思っています。ビジュアルなものを自在に駆使して、歴史叙述まで行ければいいなと。沈黙史料、絵画史料という新しい史料が増えたということではなく、それらの読み方によって、これまでの発言史料、文書史料の読み方が変わるということです。両者の相互作用が起爆剤になって、さらに深い史料の読みがもたらされるのではないでしょうか。私の所属する画像史料解析センターには3つのデータベースがあり(http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/gazo/gazo.html)、古文書、古記録を画像として扱えるようになりました。文献史料は読むものであるばかりではなく、画像データベースを通して見るものでもあるのです。絵巻物、絵図だけが画像史料だとはいえなくなってきています。

若い人への期待

まず自分の視点できちっと先行研究を読み込むというスタイルを作ってほしいですね。私はこれが研究の王道だと思っています。飛躍して、現実から切り離されたところで新しい議論が独創的に作られるということはほとんどありません。先行研究との緊張関係から、あらたな研究地平が切り開かれます。

いまの若い人は独自のチャンネルをもって、似たような研究を進めている人々と交流しており、自然に専門分野を越境しています。私の場合はほとんどが独習でしたから、その点では大きな変化ですね。絵画史料でいえば、羨ましいのはいまの人が高精細な画像を利用できることです。ただ、若い方々には現実との緊張感から問題を発見するという力が弱くなって来ているような気がします。危機意識とか閉塞感をどう超えるか、ということについてまだ突破口を見いだしていないのではないか、と思います。

〈インタビュー〉 中野実(東京大学史史料室助教授)

画像史料解析センター
ホームページ

AEARU Student Camp in Tokyo

東アジア研究型大学協会の活動と学生キャンプ2000

熱気あふれる相互交流

分科会発表風景

東アジア研究型大学協会(AEARU)は、東アジア地域(日本、韓国、中国、台湾、香港)の主要な研究型大学のフォーラムであり、1996年1月に設立されました。その目的は、教官および学生の交流、共通カリキュラムと単位互換、施設・情報・資料の共同利用、研究・開発に関する協力、特定課題に関する会議・討論の共同開催などを含む事業を実施するために、相互に関心のある分野を調査し、特定することとしています。東京大学は創立メンバーであり、現在17大学、日本からは筑波大学、東京工業大学、京都大学、大阪大学、東北大学が加盟しています。昨年10月に台湾大学で開催された総会で蓮實総長が会長に選任されています。

学術的活動としては、ウェブテクノロジー、バイオテクノロジー、文化などに関するワークショップを、毎年8〜10件ほど開催しています。

学生交流としては、学生キャンプを2件開催しており、同世代の若者が1週間ほど寝食を共にし、学術的なテーマから身近な問題について英語で話し合います。学生が国際的な経験を積むと共に、アジアに対する認識を高めるという点で大きな効果があります。企画運営はすべて学生によって行われています。

今年の学生キャンプは、香港科学技術大学と東京大学が主催し、香港には本学から6学生が参加しました。「都市問題」をテーマとした東京のキャンプは、国立オリンピック記念青少年総合センターを宿舎としました。企画・運営は、昨年のキャンプ参加学生を核とした組織委員および協力者25名が担当し、大学紹介、都市問題に関する基調講演会、参加者の調査報告会、東京都水リサイクルセンターなどの見学会、大都会東京を体験するオリエンテーリング、体験と調査に基づく研究成果発表会などを実施しました。参加者は、各大学から2〜4名推薦された優等生です。黒い髪と同じような顔、おそろいのTシャツを着た若者集団は、出身国を推定することすら困難です。英語を共通言語として、あちらこちらで会話が始まり、その熱気と疲れを知らないエネルギーは凄まじいものがありました。学生主体とは言うものの、事務部研究協力部国際交流課の支援が大きく、都市問題を専門とする教官が助言しました。

小谷俊介(おたに・しゅんすけ　大学院工学系研究科教授)

〈左〉学生キャンプ最終日の夜(蓮實総長を囲んで)
〈上〉グループ毎に企画に参加する学生たち

キャンパス散歩

ふだん何気なく行き交うキャンパス。
その歴史あるたたずまいに眼を向けると、
新しい発見に出会う。

散歩人

藤井恵介

東大の時計塔

東大に通う人々がいつもみている時計がある。だけど、目に入っても気にならないらしい。東大闘争の後に入学した頃、安田講堂（写真❶、大講堂、大正十四年、登録文化財で東京都の第一号）は荒れて内部に入れず、その時計を頼りにしたこともない。今年入学したばかりの女子学生に聞くと、毎日その前を通っているのに、教養学部第一本館の時計塔（写真❷）の時計は気にしたことはないという。そこで調べてもらったら、四面に時計盤があって、時刻も正確だった。

もとの加賀藩本郷邸が文部省用地となり、明治九年に医学部の前身東京医学校（写真❸）が移って来た時、その本館の屋根の上に立派な時計塔が乗せられていた。文字盤は四面、時打装置を持った。その音色はきわめてうるわしく、本郷キャンパスのみならず、不忍池に臨む無縁坂あたりまで鳴り響いたという。続いて本部事務所と法文二学部は明治十七年に神田錦町から本郷に移転、理学部も明治二十一年に移った。J・コンドルの設計した法文二学部は本郷通りに面して、医学校とは別の方向を向いていたが、時計塔を持たなかった。理学部もそうである。

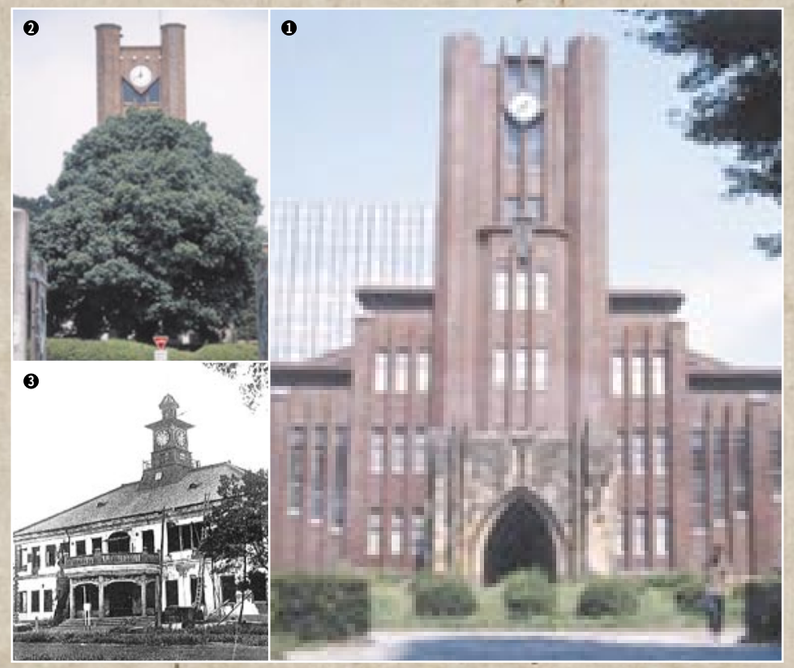
しかし、何故か明治二十一年に移った工科大学（写真❹）には時計塔が造られた。その前身、虎の門にあった工部省工学寮の建築（写真❺、当初博物館のち生徒館）は、明治六年に建設、東京で二番目にできた時計塔を持っていた。明治期の東京名所となって頻繁に画題に使われている。辰野金吾の設計した本郷の工科大学は内庭を持つロ字型の建築で、奥の屋根の上に時計塔を乗せていた。本郷通りに開いた借正門（現在の正門の位置）辺りからは見えない。その鐘の音はささやかで工科大学本館付近の人々の耳にようやく届くほどだったという。きっと先にあった医科大学の時計塔に遠慮して、工科大学近くからしか見えないよう、聞こえないように慎重に配慮されたに違いない。工科大学校舎は本館の後ろに増設されてゆく。

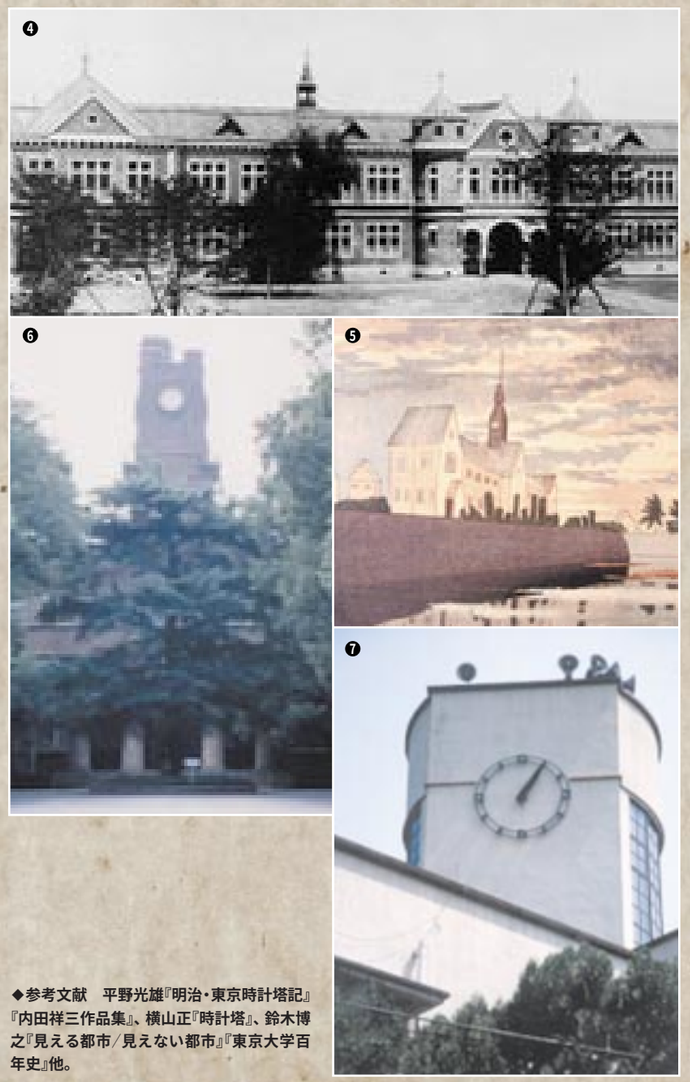
医科大学（前医学部）本館（写真❸）は、明治四十四年に不用建築として取り壊されて、赤門の脇に移築され史料編纂掛の建物になった。その時、明治初年以来の時計は下ろされた（なお、昭和四十四年に小石川植物園に移築、重要文化財）。

東大に大講堂が計画されたのは明治末年だが、大正十二年の関東大震災の直後に完成した建物（現存の安田講堂）は正面から見ると時計塔そのものに見える（写真❶、文字盤四方）。医科大学本館の時計が外されてから十数年後に、本郷キャンパス全体に君臨する時計塔が復活したのである。時打装置が付いていたが、うるさいのですぐ鳴らすのは止めたという。設計を指導した内田祥三（後の総長）は、大震災で焼失・破損した本郷キャンパスを復興し、点在する他のキャンパスに建築を続々と誕生させるが、それぞれの中心建築には時計塔を設けた。内田は時計塔にキャンパスの時をゆだねようとした、時計大好き人間の最後の世代のひとりであったかもしれない。ただし時の音は打たない。

内田の設計した時計塔で安田講堂以外に東大に現存するのは以下の通り。教養学部本館（元第一高等学校本館、昭和八年、国登録文化財）、航空研究所本館（写真❻、文字盤四方、現在駒場Ⅱキャンパス十三号館、昭和四年、国登録文化財）、理学部附属植物園（小石川植物園）本館（写真❼、文字盤二方、昭和十四年）。

ふじい・けいすけ（大学院工学系研究科助教授）





◆参考文献　平野光雄『明治・東京時計塔記』『内田祥三作品集』、横山正『時計塔』、鈴木博之『見える都市／見えない都市』『東京大学百年史』他。

東京大学広報誌
TANSEI
October, 2000

第3号

本号の編集にあたっては、多くの方々のご助力をいただきました。写真の使用に関しては、東京大学アルバム編集会をはじめ多くの方々にご協力いただきました。
なお、表紙の写真は本広報誌と同じ名前の東京大学海洋研究所、研究船・淡青丸です。

編集発行　東京大学広報委員会
編集委員　大塚柳太郎　大学院医学系研究科教授
土屋尚之　大学院医学系研究科助教授
内野儀　大学院総合文化研究科助教授
黒瀬等　大学院薬学系研究科助教授
羽田正　東洋文化研究所教授
大矢禎一　大学院新領域創成科学研究科教授
中野実　東京大学史史料室助教授
印刷・製本　印象社
発行日　平成12年10月30日

お問い合わせ先
東京大学総務部総務課広報室
〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
電話　03-3811-3393
FAX　03-3816-3913
E-mail<kouhou@adm.u-tokyo.ac.jp>
URL<http://www.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>

▶展示

■総合研究博物館　骨―生きものを支えるもの
7月24日(月)～12月22日(金)10：00～17：00
(入館は16：30まで、土日、祝日休館)／総合研究博物館
＊11月1日(水)～12月15日(金)は土日、祝日開館(月曜日休館、臨時休館あり)
問い合わせ：総合研究博物館
☎03-3272-8600

▶公開講座

■第94回(平成12年・秋季)東京大学公開講座
テーマ「分ける」
9月30日(土)、10月7日(土)、14日(土)、21日(土)、28日(土)／安田講堂
問い合わせ：財団法人　東京大学綜合研究会
☎03-3815-8345

■千葉演習林公開講座「緑の教室」
10月20日(金)／千葉演習林
問い合わせ：千葉演習林天津事務所
☎0470-94-0621　☎0470-94-0059

■第23回生研公開講座　イブニングセミナー
「ITで変わる都市のインフラストラクチャー」
10月20日(金)～13年1月19日(金)毎週金曜日(祝日除く)18：00～19：30／生産技術研究所駒場II　B棟7階会議室
問い合わせ：生産技術研究所総務課庶務掛
☎03-3402-6231(代表)
URL<http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/announce/>

■保健センター健康講座
10月25日(水)、11月24日(金)、13年1月23日(火)、2月16日(金)時間は全て16：00から約1時間(12月は日時未定)／保健管理センター2階会議室
問い合わせ：保健管理センター健康管理室
☎03-5841-2580

■愛知演習林公開講座「里山の歴史を訪ねて」
11月19日(日)／愛知演習林犬山研究林
問い合わせ：愛知演習林事務室
☎0561-82-2371

▶シンポジウムなど

■文系4研究所共催シンポジウム
「21世紀の世界秩序―グローバル化と公共性」
10月5日(木)／山上会館大会議室

■「電子励起を用いた原子分子操作」第2回公開シンポジウム
10月6日(金)13：00～17：00／山上会館大会議室

■International Colloquium of the Islamic Area Studies Project: Intellectuals in Islam in the 20th century: Situations, Discourses, Strategies
10月13日(金)～15日(日)／ホテルJALシティ四谷　東京

■Postmodernism: its Conditions and Problems in Asia
10月21日(土)10：00～17：00／大学院数理科学研究科大講義室
＊本ワークショップはすべて英語で行われます。
問い合わせ：研究協力部国際交流課
☎03-5841-2094

■The First International Symposium on Supercritical Water-cooled Reactors, Design and Technology (SCR-2000)
11月6日(月)、7日(火)、8日(水)／工学部2号館セミナー室
問い合わせ：E-mail<mami@tokai.t.u-tokyo.ac.jp>
URL<http://www.tokai.t.u-tokyo.ac.jp/scr2000/>

■21世紀の大学像を求めて―東京大学教養学部創立50周年記念シンポジウム
11月11日(土)13：00～17：30／東京大学教養学部900番教室
問い合わせ：教養学部内シンポジウム実行委員会
☎03-5454-6004

■東京大学国語国文学会公開シンポジウム
テーマ「景と時間」
11月11日(土)14：00～／山上会館大会議室
問い合わせ：大学院人文社会系研究科国文学研究室
☎03-5841-3818

■農学部公開セミナー
11月18日(土)／弥生講堂一条ホール
問い合わせ：農学系総務課広報情報処理掛
☎03-5841-5484

■第5回分生研シンポジウム
テーマ「生物応答シグナルの分子基盤」
11月24日(金)／池之端文化センター1階「鳳凰」
問い合わせ：分子細胞生物学研究所　橋本祐一
☎03-5841-7847
URL<http://www.iam.u-tokyo.ac.jp/shoureikai/5thsymp.htm>

■「薬物及び生体分子の高感度高性能分析・解析技術の開発に関する研究」
11月30日(木)13：00～17：00／山上会館大会議室
問い合わせ：大学院薬学系研究科　今井一洋
☎03-5841-4760

■平成12年度VDECリフレッシュ教育　VLSI設計教育コース
コース1：HDLによるディジタル集積回路設計と演習
12月6日(水)～9日(土)／工学部10号館4階VDECワークステーション室
コース2：アナログ集積回路設計と演習
12月14日(木)～16日(土)／工学部10号館4階VDECワークステーション室
コース3：最先端VLSI設計実例
13年1月9日(火)、10日(水)／工学部11号館講堂
問い合わせ：大規模集積システム設計教育研究センター
☎03-5841-8901
URL<http://www.vdec.u-tokyo.ac.jp/Refresh/announce.html>

■第5回物工COE国際シンポジウム
テーマ「スピン・電荷・光―結合系の相制御」
12月12日(火)～15日(金)／湘南国際村センター(神奈川県三浦郡葉山町)
＊参加ご希望の方は事前にご連絡ください。
問い合わせ：工学部物理工学科COE事務局
☎03-5841-6867
E-mail<sophia@ap.t.u-tokyo.ac.jp>
URL<http://coe.ap.t.u-tokyo.ac.jp/>

■UT Forum 2000 in Silicon Valley and the Bay Area: Future of Life Science and Biomedical Research in Universities
12月15日(金)8：45～17：30／スタンフォード大学 Fairchild Auditorium
問い合わせ：医科学研究所内UT Forum事務局
☎03-5449-5660
E-mail< a-toda@ims.u-tokyo.ac.jp>
URL<http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/moldev/>

■21世紀における水環境制御のための複合微生物系利用
13年2月5日(月)～7日(水)／山上会館
問い合わせ：E-mail<reg-coe@env.t.u-tokyo.ac.jp>
URL<http://www.env.t.u-tokyo.ac.jp/COE/index-j.html>

駒場祭

11月24日(金)～26日(日)
東京大学駒場キャンパス
目黒区駒場3-8-1
(京王井の頭線「駒場東大前」駅下車すぐ)
問い合わせ：駒場祭委員会
☎03-5454-4349